

FLOSSCOMI Cマンガ大賞 コミカライズ部門 課題用SS

著…紺野潤

■登場人物

主人公…メイリー・ラスコット（某国・某公爵家出身の令嬢）

元夫…ロドリオ・ハイゼン（某国・ハイゼン公爵家当主）

現夫…ルイース・ラスコット（ラスコット王国・第一王子）

■あらすじ（前提）

主人公のメイリーは二年前、夫のロドリオに突然離縁を告げられた。その後、生家が没落するなど様々なトラブルに見舞われた後、隣国ラスコットの第一王子、ルイースに見初められる。当初はルイースからの溺愛に翻弄されて戸惑っていたが、次第にメイリーも彼の人柄に惹かれていき、求婚を受け入れて再婚した。

夜会を中座して向かったバルコニーには、先客がいた。

「……メイリー？」

月でも眺めていたのだろうか、その人は欄干に片手を置いて振り返り、私の名を呼ぶ。

視線が合った瞬間、私は考える間もなく踵^{きびす}を返していた。

「待ってくれ！」

背中^{せなか}に投げかけられた声に足が止まる。その言葉に従ったのではない、あまりに驚いて動けなくなったのだ。

彼の張り上げた声など、初めて聞いた。

政略結婚とはいえ曲がりなりにも夫婦として過ごした五年間で、たったの一度だつて人間らしい感情を見せてくれたことはなかったのに。

「少して構わない、話をさせてくれ」

「……困ります、ロドリオ様……いえ、ハイゼン公爵閣下」

言い直しながら、おそろおそろ振り返る。

一目で屈強と分かる、大柄で厚みのある体軀^{たいく}。頬^ほは少しほっそりとしただろうか。それでも相手から言を取り上げる威圧感^{ゐあつ}は健在で、漆黒の髪^{かみ}の隙間^{すきま}から覗く紺青色^{のぞ}

の瞳は深海を描いたかのように冷たい。

「……もう、名前では呼んでもらえないのだな」

ぼつりと零^{こぼ}された言葉に、耳を疑った。

「そうしたのは、貴方^{あなた}様ではありませんか……」

あれは二年前、冷たい雨が降る日。

彼は理由も添えずにただ一言、離縁^{りえん}してくれ、と私に告げた。

突然の宣告に私は目を見張り、固まった。わずかにでも前触れがあれば、もう少しまともな反応^{はんお}ができたのかもしれない。

さすがに理由を尋ねなければと口を開いてみても、唇が震えるばかりで声が出なかった。私が何を言っても、彼は答えるどころか眉ひとつ動かさないだろう。理由を言わないということは、私には聞かせる必要がないということだから。

彼にとつての私は道端に転がる石くれも同じ。蹴^け飛ばしこそすれ尊重する存在ではないことは、それまでの五年間で嫌というほど思い知らされてきた。

結局絞り出せたのは、お世話になりました、の一言だけ。

そうして理由も分からないまま、私は独りになった。

「……お前には申し訳ないことをした。だが、訳を聞いてほしい」

彼が一步近づいてくる。すぐのような目を向けながら。

私は幻覚でも見ているのだろうか。あるいは知らない誰かが彼に化けて私を騙だまそうとしているのだろうか。

彼はこんな情けない顔をする人ではなかったはずだ。少なくとも二年前までは……。

「メイリー、俺は……」

「やめてください」

胸がざわつく。

「離縁した後、私に何が起きたのかご存じでしょう？」

「ああ、だからこそ今日ここに来た。真実を告げるために」

やめて。惑わさないで。

流浪の末に辿り着いたこの地で、私はようやく安息を手に入れた。

今はこの国に一緒に生きたい人がいる。石くれではなく宝石のように私を大切にしてくれる人がいる。

「俺はあの時、お前を……」

何かを言いかけた彼の視線が私の背後を捉えた。

振り返るよりも早く、私は誰かにぐつと肩を抱き寄せられる。

「俺の愛しい人をあまり困らせないでくれないか、ハイゼン公」

耳元に降り注ぐ、どこか演劇めいた軽やかな声。

追って香るのは、花の蜜がとけた夜露のように甘美な芳香。

——ああ、来てくれた。

「ルイース様……!!」

「やあ、メイリー。君に呼ばれた気がしてね」

柔らかな金の髪が夜風に揺れて月光を散らし、きらきらと淡く煌きらめいた。

優しく垂れたまなじりは、私を見つめると一層甘やかになる。その奥にある瞳は春の穏やかな湖の色をしていて、乱れた心をそっと落ち着かせてくれた。

同じ青でも、ルイース様の瞳はこんなにも温かい。

「さて、ハイゼン公。弁解があるのなら聞こうか。もともと、この美しい人が今は俺の妻であることを知らなかった、とは言わせなければ」

「……滅相もございません、ルイース殿下」

彼はそれまでの雰囲気消し去り、折り目正しく返した。強大なラスコット王国の王位継承者であるルイース様を前にしては、その威圧感も鳴りを潜めている。

「そう？ 何もないなら、俺たちはこれで」

「お待ちください。叶うならば、妃殿下と少し話をさせていただけませんか」

「……何か事情があることは察するよ。でも同情はしない。今さら何を言ったところで貴公がメイリーを傷つけた事実は変わらないだろう？」

言いながら、ルイース様は私の背に触れて扉の前に連れていく。

「理由なんて、時が過ぎればただの言い訳だ。たとえそこに崇高な真実があらうともね」

一瞥と共にそう告げて、ルイース様は私を建物の中へ促した。

バルコニーを後にして、月光が差し込む薄暗い回廊を歩いていく。背に当てられていた手はゆっくりと滑り下りてきて、優しく腰元に添えられた。

「ごめんね、君の意見も聞かずに出てきてしまつて」

「……いいえ」

あの人がどんな顔をしていたのか、後ろ髪を引かれる思いが全くなかったと言えは嘘になる。それでも振り返るべきではないと思った。

私はあの場に留まるよりも、背中を押してくれた優しい人と共に前へ進みたい。

「私の気持ちを無視したのではなく、汲んでくれたのですよね？」

「どうかな、単純に他の男とふたりきりにさせたくなかっただけかもしれないよ」

「そうなのですか？」

「君の好きなほうで捉えてね」

「……ずるいです」

ルイース様は時折こうして煙に巻くようなことを言う。戯れの会話から本心を見つけるのは難しく、でも嫌な気はしない。

私をからかうとき、ルイース様はとても愛おしそうに笑うから。

「その拗ねた顔が見たくて、ついね。もちろん、君がずるい男は嫌いだと言うのならやめるけど」

口ではそう言いながら、ちっとも悪びれる様子はない。嫌いではないと分かっている、この台詞もまた私を拗ねさせたいだけ。

意地悪で一枚上手なルイース様に、私は翻弄されてばかり。今日も思い通りになつてしまうのが少しだけ悔しくて。

「ずるいところも、好きです」

せめてもの反抗心でそう呟いた。

結局、自分でけしかけておきながら恥ずかしくなってしまうて、いたたまれずに

視線をよそに向ける。

すると不意に顔を覗き込まれて、さりと口づけを盗まれた。

「……君が可愛いせいでよ」

そつと離れた唇から零れる、ほんのり低くて艶っぽいさめき。

先ほどまでのおしゃべりな空気は消えて、見つめ合うだけの熱い沈黙が流れた。

鼓動が耳に響くほどに鳴って、胸が苦しい。

いつもは困ってしまうくらい雄弁に愛を語るのに、たまにこうして言葉少なに見つめてくる。そうして私はまた振り回されて、心臓が休まる暇はない。

ルイス様は本当にずくて、愛しい人。

「……駄目だね、君の前では一番紳士でいたいのに」

真面目になつてしまった雰囲気改めるように、ルイス様は大仰に肩をすくめてみせる。

そして私の手を取った。

廊下の先を見ると、夜会が開かれている部屋の扉がすぐそこにあった。中から漏れ出す灯りが床を照らしてぼんやりと光り、私の心を誘う。

あの扉を開ければ、そこには煌びやかな世界が待っている。

「行こう、もうすぐダンスの時間だ」

「……はい！」

私はめいっぱいの笑みを浮かべて、明るい場所に連れていってくれる彼の手をぎゅっと握り返した。